



倭歌一變連歌。又變俳諧。最行于世。蓋
言語異時。文移。故有古言。有時言。有雅言。有
方言。中世以還。漢語梵語。上下均用。倭歌素
守古雅。自身。連歌。執中。不捨時言。皆採漢記。
俳諧。則俗詞雅趣。平生以舌。方時。梵漢。
皆可以入以詠。是其所以通于俗。而愛于世也。
俳門。教幡。室井。之法。最通。最受。近數十年。
執其中厚者。乃晉叟。永機。初襲其南。本。弟
七世。字。近。晚隱。芝園。瓦。氣。堂。今。歌。古。稀。加。五。

頃日料理亦承以降不咏。曰序文集者。夫唯
 大觀先生歟。全興更如儀于餘年。其人於艷
 如梅花。其心富貴似牡丹。宜矣。咳唾金玉。
 白樂天為香唐一大詩宗。我邦之盛傳唱。
 而有白仙之稱。唯其有之。是以為世不受
 敬也。我々欲取此集。擬之白氏集。不知
 雙首肯否。余言多。不。

明治丁酉重九

白念坊如電



新五元集

嘉永

万延

明治

安政

元治

室晋齋の硯之鼻祖。幽遠の後
 江戸巢鴨乃隱士暮潮。カキ
 数十年。新天明未春。田沼の
 多々。三弄子。贈。水。大坪
 いと。幸子。硯。八存。大坪
 何の。所持。カキ

生死の火

元日向暮行り一のりや
り子つとやあふの命とまほしき

芝公園より行く

月をよみ去る物乃こそ所
白く酔ぬ泥

白く酔ぬ泥

力のたむ着ようらぬこけ
つらつらお芝居見と泣き玉の春

たふ三三三

俵子扱ふまて接ふ子ねらぬ
齋の夜草のたふ鬼のまこけ

齋の夜草のたふ鬼のまこけ

狢公坊の書三の采木ぬくり

一月も三のりく樹のつら

土物のたふまを

夕暮れあふまこ路を灰赤赤

木をうつこたの是とたんと

み水はらうまじのたうあま

小原魚をまをと名やうあま

春盤

いさや指八所謂五大列

哀白の苦界の情よあつた

かんど町

大坂より市川丸船界目園遊へ後居

高きところを井戸の器用あ
初ま何れ入こむ敷中しす
まの青むしし曲のまふ袖を
鶯や初音おたりきりまぬし
きりぬきおきぬりぬのくぬす
明子板折りの抱後お小佐城

築親元散里

新入おきのふりふりおきぬし
まりの雨詠ぬき戸口おきぬ

物形くハ吹花さしと 唯のふ

松田登中

まろ梅り けの岩間の遠海
梅りやあそびぬしあそび
あそびぬし梅りあそびぬし
お梅りあそびぬし

た我虫のけをけけけけ藻は草
花も梅りあそびぬし
春節あそびぬし

あそびぬしあそびぬしあそびぬし

咲梅のなつしづきのうらみ
お母のあはれをたぎらぬ
吹雪の雪の梅のあはれ

おのこ持しおとれ救の梅
月見の月自陰甲の梅の心
蓮生か梅あつ中の岩園白
寝ささし川の情やんぬり

流軍のしらに鳥入を解りし

さくらんぼの只梅乃産

伊豆保

温泉ありし梅をのち山の岡

笑洲向

杯を氷の海嵐揚る梅の
飛ねのりし柳をささるし

隣のもすあやうし

かぶらぬちをちのほろむが
いらぬのりし梅のあはれ

對娼婦

益をみすぬちの海を

関守の祈りよよ余實しん
其の言を子女の懐にいり育る
わんげん像舞をいあしく歌ふ

甲西正月亞米利加舟来船

わんげん像舞のえき退帳

区々々の歌よよ歌もよよ
善のえの軍よにまはるか道猫
恋猫の勤めすよよ後よ

百年情裏過

生柴のわんげん余實しんよ

何國中はあうらり連女三の居の
強もけにけり里の大將のあまの
かきけりあまのいさかあまの
晋子あまの五徳はゆて

能脛 光脛をいりりに愛の芳力を
能見 爪研も七掛けし柱たな
能狂 ねたまの物あまのまき花心
能捕 其の種り嵐あまの心音け
能耽 除くをいりりあまの心音け

俳猫の化の鼻をいりり

恋猫の望の望をいりり
口實をいりり

自注

年切と只天藝ち花のうら

くふらむさの町の御舟

ねこまぬののきこし千々水祝

寒食のうら暮とあしつち管

居部のあつらゝのや夷鯛

辛巳の女三の黄泉よぬる

飯鬼よをし俳諧中のし徳をさ

文仲う辰うらむをちつたま

まね出付

友の雪松の儼のちうらな

皆遠よ掛空の音やまの雨

種母の尻馬と踏ましらう一尾糸櫻

春の起や袴のまの小臥被

つゆまの娘のなやうあまのり

江をちやハ儼部く水の上

山吹や桐のう旅をさるやあふ

かりらおやけ子白くし後の衣

鷺のちり子孫たる科一の角
くはなぬ松くふは似も片
牛繪馬も八百屋で賣れ小梅村
そと中一糖を捌く小家が
那の陸のくろくこらやく子孫
冥相と海の大海と大願志の流
わやと茲にのみは存心を
たに小室を没後幸に面
のそと親をのこらぬ
吾漏るのちこまゝ海の巨艦の日

受託品 次八

不覺內衣裏有無價宝珠

我に代せ御座るものぬを
浮世海を度る魚の籠りの
養生の位是もくろくかを

小松宮仲庵子御入

海ぬんりきと子のの科一の角
何にきかた子もあつて徳偏ら
その品を何れかおの新のつる
そのの樂をくちをばはしこの

湯河原客中

冬程と春のうら山人も
機ももれり 持るる水村

東居安慰

ゆ塞そと蟬の宿は似るか
田の人の汗のあはれ

上皇入借敷着藁のまはり供奉皆いけ

あつたるまはりのまはり
いけのまはり

糸すちの柳をふる乙女うね

津島

魚川のみささ川柳
田西しと一もな水所

孔子盗跖一垂換

よしつと根をひらこまのあ
まのあつたるまはりのまはり

白雲多

人訪のあつたるまはりのまはり

晋公羽のそと水屋船す
井のあつたるまはりのまはり

乾元雜雨春の柳のまはり
長巽次長坤

玳瑁の櫛持のこゝろけ千六

墨改め逢

梅の白き花のこころごとさら
茶のあはれも湯あがり二月堂
水をい月も居る電の木の奥
海馬釣く人から風を春あ

寝をいあしてをよ際のおま中
情は成白のぬるりかちのい

大江山

洗儀の女と関の鬼前

梅立

那を合や松の切逢のうらあ

いこころよつとを病の光の夜

大層の美古の縁から春の海

と草や松の下とあやう和

麦畑の葉のむし玉の画は似る

上林の好うつり三々

いこころよつとを病の光の夜

梨の花を道よりくもる水

一日富岡宮よりたねて南海より
送星を身の一貧一福如泡夢明日
恩情今踏入とけ此人や一い
西南の敷をこけし旗を龍せし
泡夢の如くしし恩情をぬく人
おまごふまじくともあまの昔子る乃
斬りて八丹雲のたよりぬる丸の
軒を我翁の置る方すたぬる
是らの吟と今もちかぬに花現あま
嗚呼無智短才の俳諧談言り

ひびく立夢宴のよもよも
期を
由棠や眼を松のちみり

尾上梅幸の書状をぬる
古童のまへに四のあまを
抱上りの画入りの
かりの揚屋の酔房は昔の
よのこ人難する
の月のまゝなれお平の春
延いのまゝをて知る
昏の雨

おろそよ入相済る音よりな
私の世の迷ひ解くをなす

度阿の歌

遠山の松よつくしとあつらふ
冬よの竿のちりしちるこゝろ
水は物の一粒とわすれもの何れ

河原崎権十郎九代目園十郎とていふ
又をぬくしの園は室の一字を授け

りんご

まじ啼やまじとけうの氷の筋
多くも山よとまぬおもひの

右巻判法

津よびぬりくゆるとまら水
け雲の影よ入あつこおこる
け雲の根よあちまぬくまぬ草

壬生狂言 けうりくの欠のしおを小橋

小舟を渡すものいしの中なる
野はもいしきしきしきおな
ぬれぬ

と何れくし草のな
らうら

つらつのおもひはし玉橋

似合しと雖の浦を有馬筆
 むらゝ能ちまきと柱乃かひと
 貞徳の誓のら矢のし 能
 控の女又ささるや能の
 巨の能わつらもの外ハ業標
 舌頭無骨

古雜ヤ世の翁のわつら

觀世清康の所法いのおれつら
 とし清らよあつらつらとつら
 との表り

水牝のそらつらつら春の雨

睡りりほあの蝶ぢ人々上
 子のわつらつらつら

及故を草登り毎居一日

蝶よあれあつらつら
 せり者の座つら五人春の

たつらつら

るのつらつら 撒や浪り
 甲賀衆のつらつら 後月
 切あつらつらつらつら
 水神のゆつらつらつら

東台の堂塔六割京の市店は雲

僧侶八賣茶の美ゆりはす

有し竹の忘仲もいづらふ

官途の徴を辞せし提り

血と雲の清き所や山きみら

夕つらちをいよぬぬはあふ

川隈や楊の葉おぬらふ

いづらふとたの味本とす

何あまた願ふ道らぬ守

閑閑

ふとと群々の木のこゝと西上人
かまぬくくくハををぬまそ花せん
ぬらぬ量り寺の村子住らるる
あまらり 隠居一うはぬまきと紙し

由実帯もいづらしりくきむの宿

舟守ぬふを降をし頼冠

松栢を下仲りしおのふ

のの山ありて 西行庵

雨くくしたの花のほく若岡が

やそまふ人をあつた山さくら

花をのこしぬいしとまふ

極園

上りきたにわかれ墓を建て

万劫の行住も来りし花の庭
をり火の化はるゝ世によき上
行ふや啼し是れ公いとくさ
一ふ八坂をきりわらぬら
白雲の花一片をこけり
ふの雨暮暮しすめを口をき

とく飛

ま耶くの曲の舞

りりりの放下身をま物初櫻
まきしたと鞍おぬり 花いけらん
ま尾

小田の姉

花をまかたこちの世なみこ

六八段

花淋 豆乳中の旭乃巻じ
花をまかたこちの世なみこ

三輪

白雲やまの木の松をふり楯
山乃の初鹿をさすの法か
おとく候より形おふのた若山
月のち乃候はくさし

席品

花浴んとして浮世にまよの中
三日の外

安室

いづれもさきしむる花の葉
初ふ花の葉もさきしむる花の葉
西河をまよひての葉花の國

法隆寺よき日かきしむる

いづれもさきしむる花の葉
上野法隆寺の井の邊のさきしむる花の葉
わらわしむる花の葉

貧乏をさきしむる花の葉
捨つてし友をさきしむる花の葉
花あつたつてしむる花の葉
ふ咲しむる花の葉

寂蓮六月年かきしむる花の葉

さきしむる花の葉
子にわけてしむる花の葉

唐里子陽かきしむる

あつたつてしむる花の葉
地をわけてしむる花の葉

龍り雨雲舞し心辛夷よ
 形のもりはとある如芥の中
 摘くもさるむかしのたあ
 羽織着し詢。有や玉生菜賣
 傘さすく本持し都人
 魚はちよれ魚のいしはた
 暮れとくくまの川本もほりぬ
ちよるくまの川本もほりぬ
つとれあつたすみれのいしはた
 夕日紅なる小屋やつた如
 夕日紅なる小屋やつた如

勝地か来無定主

おほらおれ誰を何しの南田川
 秋の夜のちの休めし臆身
 まる雨まよ空よりほゆる
 一乃馬鉄のつれこくナリ雷
 春寒し控て十の玉子を売
 とぶくと田つらあ川徳身
 牛所く村
 砂おれ何のかくおし三の道
 暮れかよふよ一のちし
 かぶ

白拍子の讀

いつきり新を歎いて都は操を
と白花やちんぽみき吾妻に春を
おすり飛渡園子の望は柳を
かきし白拍子しるわいし
さるる梅子に花あけし
緑花を紅けりあり
山のちふくさのさかめきよ
うそあつては胸のうたの音
時勢を減る風を法所の茶摘ふ
春の豆の猫の端々意こころ
梅木也の枝りたらし新茶ふ

春宵は價を定り夢をかり歌を聞
ゆきし茶を扱侍に白の音り
りのいふやうなや又く豆釜中
有し語りしはとらて身は
歌何より吟掛しと
おもふる白は軽重あり白は巧拙
阿世も此根^{チヨロ}我句の梅を
笑をてそいしとや一句と
かかひ入財金地院の隆玉半を
昔もこの声所行無情と

扱木の身入さきうちの向ふをよむ
夕紅の顔のあはれまゝしるるうね

能樂

葵上
さげあ
江口
孫辰
望月
あやのやまを車のはなこのま
彼岸に佛のあしいとけや
障し杜も菩薩のまおり終るは
皮切らたうしこ二々を
夕霧の替女の小唄をまの月

山行

旅多て山蘭をむく度と世宗

蓮のふらふらによもゝ一々
川回や所も替はましの色

杜子美西行のうたをよみしに

待てあはれをよみし花もまじよみ
昏たをた向ふ多り山峯の松
神のふやうなうきしとていふ
赤橋維摩の殊勝をよみせん
照像しうとほまいたるのう音が
あま良具空
かきありの終書たうへまの氷

落枝飛渡はふを白く
堀池の名のその後に姓が
あれ雁女ま並をのそをなす
まよきを啼り飛く夕し鳥

画讀

芽花啼てそはの春のそをなす
足袋持こくまよきをなす
内庭の石利のそれそ極りふ
宿痛をいひしそをなす
お塚の外田のそを啼り

熱田

いふのそを日割のそやいふを
け講まきし持てまき春惜
花もその宿りそをなす
乃根川柳雪端そ物そをなす

宮の下

まよきをいひしそをなす

觀世音

月雪や美也ころの三喜持

吉野行脚

片室のなまこころをいづれ
魂とて笠著て巾鞋をきこみ
六向のまゝ深密情を止まら
まの秋の栞ののりも排ら
ししの春の芳野のまじり神ん
のほのめ乾神栞分のわし柳
胸のまじり一物水

園地あり行基寺作一休園地

禪干して咲くくものも菩薩橋
降中も花鹿の雨や集は清らん

成田橋上

峰くもはらののりまもまらぬ

大黒堂より一軒をのり

比叡のたのまじりし松の月

双林寺中色蓮堂の供養のまら

まのりもまもまた花供養

清水殿を

下京の塔をのりしに花のま

智道山 風佛の洞くまじりし水の中

かき 科戸もわかたぬとある系櫻
お河 小原女のくさくさ柳の家
岩山 形ぬまのさくさく流るる夕景
修学記 花くさくさの都をみたり
中堂 塔よりけしきかたはた桜の
ちの 山よりさくさくやゆる山寺
お風子 花を身より人をかたのてし

淡山夜泊

月影に花定こころ指のなす
かたのよの葉よわきまを駕の杖

竹林院津杖

さくら花の如くさくさく堅山

如意輪寺

あまの仲子御廟の花とをたお
よの川 ありさや後ゆりさのり上

高野

とや火をさよせの花と奥の心
爺いぼりさくさ所や松り奥
佛子相をさの目さゆや紀三井寺
山吹花さよさくさ下陸通

白雲峰より浮きし 皇居の
 池をよめる 蒼波をよめる 蓮花の
 氣をよめる 舟の管束松の隈の
 古びく 茨咲く ぬれ苔をよめる 啼く
 子のをちをよめる 川の系舟の
 うねり 七女系見候く 糸
 としよ 句よ かりひよ きて
 白波や しろき 昔の 須戸 浦
 繕ひを 夏の ころ けし やすまの 瀬

須戸の 糸竹の 笛の 吹く 聲 茂草の 影
 涼しく とも なる 海 舟 舟 舟

古曾部の里

新入りの 後身 舟の 早苗 外
 金亀寺 舟の 入相 舟の 舟の 舟の

嵐山遊

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

保津川

夕園舟の早ゆし一棹も
黄蘗

予もたれをたれをたれを
晴れあけ一言亭の月もたれ
茶もあけ宇摩もまぢり所
小等院

羽波の巻もたれもたれ
三飛堂よま海松もたれ浪の玉

つねのいまもたれもたれ
つねのいまもたれもたれ
笠のつねもたれもたれ
竹生嶋

玄上の指を根管のもたれ

舟も夏も霜もたれもたれ

とらる舟もたれもたれ
とらる舟もたれもたれ

何の丸を法會の茶に
組まじよ白牡丹の應量器

浪華に茶居りしころ

吾妻又鶴巻の掛まぬ製

蒼苔の隙のついでとせぬ
帰る鹿

備前河津の舟の舟人

夕立の河津の森を笠着
ゆめをたのむる舟の舟

鹿嶋

昔の人の心もあつた
お毎に舟の舟も波逆津
を居る舟の舟も舟

松岡の舟の舟も舟

舟も舟の舟も舟
舟も舟の舟も舟

天地同根唯一指

カ印三季

灌佛やれをいさむるのふのふ手
睛の緒乃地をいさむかし佛生會
か日世(生れをいさむ)佛を

卯のをいさむる日花やいさむる

石三の根。いさむるの壁六青磁乃

花入子紅標社をいさむと流るる

いさむる

をいさむる半の佛一をいさむる

古くいさむる果をいさむるの羈

猿も万果の命をいさむる

いさむるはたのいさむるいさむる

とていさむるいさむるいさむる

おろしをいさむるいさむる

行密のいさむるいさむる

いさむるいさむるいさむる

いさむるいさむるいさむる

行のいさむるいさむる

身延

八千部をいさむるいさむる

啼きし雨はゆるぎなくあはれ

五月十日の上野の戦を述べて

血を流す雨はあり 杜若

羅漢の讀

日影を世田のまゝあはれ

初めのうら

声毎に涙のまじりあはれ

はな河

川上の雨まじりあはれ 郭一公

花のたけの音は

えいせいとのうらあはれ

於亀戸社頭子向批口

守戒と自徳とあはれあはれ

花のたけの音は

角のまじりのあはれ

花の押あはれ

夕のつやを葉吹ちあはれ

啼きし雨はゆるぎなくあはれ

忠度の墓をたてあはれ

あはれ

郭一公をたてあはれ

聲よ身のかきし遠し一節

於天壽舞樂一也

伶人の祥振ふるに於て

天王寺のわらわしとては推しの舞に

父母をささす翔よほつた

昔あま心あすありあきあき

男のこも形ひちて廣崎のわらの

おつた言はくは中から三すゝと

まゐればおの覺えはははの

鼻よまごし似らるるさして女

はみねの本のよみかたのいふた

男いふはまきつゝあひ

みは舞のいよはつてあまのうし

ハ人まわし此一はを後におろ

鬼の子ははははははははははは

松をわらわのきこしたはあ感はあ

諭き喟夫

浪の啼音は夜をわらわ

獨坐

あ柳をさ金とてはくつらん

宵の月を照らすも暮らぬ
顔を見てもあはれ雨の血を吐く
我何の起法を中へ鳴呼公道
無常迅速

日よまた寝てか寝ぬおぼえり

よし押せし入の夜や又を

東海寺懐古

も孝阿堂に撞撞も無一物

山孤舟きしきう夜うら

楳洞寺

せつこの花は蛇まむ柳うら

修善寺

晴く雨行るやまのいそ夜能
知子の子なきもふかむ藤の奥
入毎中お結の湯ある是夏行
蒲ののちの所や回舟

東島のこころに心経生房といふ所
そハ一巻よみ終るまはしと煮物
こころを府下涼音のおのこころ
かぬしとこ

一とさう山舟すまこ鮪の壁

此のよはうして

葉仙をよむと旅の一夏か



太宰府

青帯の女をのりての早苗

一巻の野中

兼言代鳴り中言取す南極

丸山の故樓に揚貴妃の記をたづね

みづ波のこゑをたづねての松

早乙女は河原のあむらひ

小舟の夕暮人やはなれ

輪回

玄海

豆を扱ふ宿守舟と改め

因州公言はる

大仰の羽織を色む

諏訪社頭

藤の花に染かきし

蘭の道をよし押さる

寺の夏をいも

竹切の珠紋を

石女のみを

と現る中

一返居よりちりて終りし

旅すれは故も入邪し若相識

葦川師信の画の小船後の古歌集に於て
加へるをよむ そのうへに後中心よりして
これれ懐の乱事をもむ

相槌の又こんと啼し短夜外

故きうらむのなをにせまのり意

みし世のあけ清らみのちらの故

さら夜の海を東へらむし行

大浦の家集をよむ

さくらたけやるる川へり仮り宿

弁菱

梨妻羽所よりまに

五角何争か是二窩

てむしのなき成老のすうら

陽崎の羽もさそめや櫓の月

山陰や沼水もあまき移りのかさ

勘きの子孫せほやまき親のまじ

のうねくまの子持ふる世か

三越り柳のころ

榎の上より持る子清水へ

清水より染まけぬま田嶋へ

菅谷

桑川翁

八橋

龍鹿

石龍

浮海

石翁

夏菊やまの秋なる花の煙
 はるくと来しと六月牡丹
 鬼負合や千の矢せんの道る雨
 柳細しは流る昔しきり
 お龍も絞る序やびくまの
 くま田原いし一雨をい心
 柳中流る夏小園越
 牡丹の枝の園やま川置
 光起の画きよのよ
 てむしや装法師といしあり

水音如知のふつと流るる
 心しききよあまのふり

田家

伯樂乃芍薬さふの庭をけ
 芍薬はくしうは山家さ

功德品 第十七

春中つゆを飽みは牡丹
 鮎ねむるは青はし
 此花は夏の封切る牡丹
 菓子盆は牡丹

若の屋

短夜をよみけりも色や恒狼狽
みよこころかりらたぬ雨片

梅年の雨雲の影

不知火や白ししのりけり
夕牧きく雀の林も賑やゆ

いよるけりや

夜神も涼しは及ばぬ業
夏むけりんもこのころの月
はよのるり日おほ小鯨美
不行ぬこそれをすける夜の跡

竹より宿啼てみせしきりて
水鏡をいりしけりありは靡

延宝調

卯のきの雪原をうける女あり

隔坐聴碾茶聲

心經のわひし咽やまらね

竹生嶋 謡曲の緑樹影沈む

船もつ宿き言て静のわたり
挽も葉まよつる遠く竹牛
茶柳ぐさぬりもをりん

花柘榴のつぼみ雨乃降りて
十薬のむすむすは白く

乾乃の竿乃ちまよ青乃し

海島樓中

夕日の中を流るる清水が
柏木の梢より果てて一夜月
里もあつらむにぬふ街堂を
染むる千載のつらきま
扇射しつらむとよとよし竹

海島の頌

圓中子角阿の八天地はのりて裏面
のありし四海のつらき孔方見たり
守りては唱へて是れ一仙

けしみのけしき所や風流し
けしみのけしき所や風流し
けしみのけしき所や風流し
けしみのけしき所や風流し

大福生寺の氣 壽量品の心を

おんあつらむとよとよし竹
青梅やほい根をぬき乃種

世
瀧の靴子花を叩きし招の音り
身を敲つたる閑河細腰の湯女の
紫の内も涼しうとくくくや俄に
旅人の向ふの白八幡の相も
不識とわや

豊公のぼる寝の泣きあふみか

頭上甲山の石をいづくお脚下
大物浦の船を遊べて駕の座
幽奥の柳の底はうらやま
うらやまの草をよみ花抽か

藤を新生をま

あはれ乃た子吹成ははみこのあま

新ひ我言者の関へ清見酒

人間のつらさををさすれお腰の
くろくは床の外の形
三四つ乃靈字此床をねむる中
冠を叩きを刀代御馬よめ
顔相又集よつて

美しや白田の夜船り寝

酒後嘗稱老畫師

吾の画々し標のふかおは

日々興春衣いま又

形もふらふらぬ者よあはれ

下木

わくもをかりよのおきやの夏の空

厚川

鈴鈴の虫さるるまきよる泉原

善光寺

夏の入や殊紋の四喜庵寺より門

徳庵堤舟中

さくし癒したのちいらた落小

葉櫻や吉水院の茶振と

青磁の系つゝの郷土を教

その皮紙竹の子賣のふいぎ代

魚市涼宵

おはつ三日月落る町の中

佛家の三空行 有為空 無為空

早竟空

行水や影もなせもゆり文

あるまのしるおきし川の巾

ゆきぬやせとおけの干頭能

夏の夜の切しほあやの浮城山

玉首も老鳥の火のそとらが

活花も一おのたるや籠もあ

夏の電の若さいふやあ

ほ接のいふはあ床の子

り

善通寺

因是より彼佛舍利を拜する金也
知くしる光何れを拂ふこと
韓退之の表を階ておのしく晋子に
名振す

際向は凡俗に非ずし一足疾鬼

の都や新をいらししの飄が 生野
朝衣やふしの骨を恒恨るか 其角

お外の古創妙好世の心算は
白雲の如く極徳の心はまじく

吾輩やまよふ心は
はるかにあはれなる心は

善見寺 くらひの有明ふりや奏さ

の鳥よ夜とあけやあけくも
宿つてまけの所へ鯉介
初丹や鯛の後戻のとき鯉
夜鯉や身の小り水き
或徳の人かきよまをさす

原憲之徒蓋ふ如是

折人や妻を約の鳩をた玉目浮
入たのめをき透くし青を
二里はあまのこにまじりて

又立陣の舎人のあしをさし
まゝに形ありては
かき飛りて美し
遊女はたん
お向ふ心潤あゝ
日よきと行はるる
お作はら師の内縁の男まさき

とくはな

黒髪より夕月ころもまふふ
古川おとろの池り
人新のみるをわける
植ねる

室八嶋

飛べしも里の池あり
みしを又夜のま
尊と舟こそなれ
桐花ありしれ
玉床や白い花さ
新橋の中
香丸

津を髪と誓ひ
板を帆や
閑子を帰合
毒と行の

七月廿の成子所を慶崎行り
ゆは後舟をいしし舟を子輝こら
安養尉里の川舟をいしし舟を馬を
子文の舟の舟をいしし舟を馬を
清房の舟をいしし舟を馬を
清房の舟をいしし舟を馬を

川舟の舟をいしし舟を馬を

舟の舟をいしし舟を馬を
舟の舟をいしし舟を馬を

紅龍山布施寺

塊や舟りしのせし布施寺

舟りしのせし布施寺
舟りしのせし布施寺

一棒の先是より夏乃る列

旅舎市店より

いつかりに旅舎市店を起て敷公

富谷の原をけり馬道のものを赤坂

那堅手近也いしし遠去て
馬のりしをいしし遠去て

藤のふけ野行してをよま
物

龍岩

子牙や大河の前り舟り水

舟り水
舟り水

津水之原

冷しや麦の植根しの大の飛

東海天

扇もて量りよるれりの文

病身無所用唯解卜陰晴

とわくしつゆのくさ涼し外

大衆行者無諍骨壺之銘

喜々悲々一條鉄 昨日晴 今日雨

極く清く灰をこぼすまのしな



